

第64回松本歯科大学学会（総会）

■日時：2007年7月7日(土) 13:10~17:00

■会場：講義館201教室

プログラム

評議員会・総会（2007年度）

13:10~14:00 評議員会および総会 201教室

一般講演

14:05 開会の辞 平賀 徹 准教授

14:10 座長 平賀 徹 准教授

1. 歯胚基底膜におけるIV型コラーゲン α 鎖の消長に関する免疫組織化学的研究○中野敬介¹, 永井教之², 川上敏行¹¹(松本歯大院・病態解析), ²(岡山大院・口腔病理)

2. Wnt5aによる破骨細胞の分化促進効果

○前田和洋^{1,2}, 小林泰浩², 溝口利英³, 中道裕子², 山下照仁²,衣川さや², 宇田川信之⁴, 丸毛啓史¹, 高橋直之²¹(東京慈恵会医大・整形外科), ²(松本歯大・総歯研・機能解析),³(松本歯大・総歯研・生体材料), ⁴(松本歯大・口腔生化)

14:34 座長 大須賀直人 准教授

3. 当科における顎変形症手術の変遷

○安田浩一, 富田郁雄, 梅村哲弘, 上松隆司, 古澤清文

(松本歯大・口腔顎顔面外科)

4. 過去10年間の当科における口腔癌治療の変遷と今後の課題

○上松隆司, 松浦 隆, 寺本祐二, 高橋美穂, 堂東亮輔,

森 亮太, 安田浩一, 古澤清文

(松本歯大・口腔顎顔面外科)

5. 口腔癌手術における微小血管吻合術の応用

—当院の治療成績—

○森 亮太, 上松隆司, 安田浩一, 堂東亮輔, 古澤清文

(松本歯大・口腔顎顔面外科)

15:10 座長 酒匂 充夫 講師

6. アマチュアゴルファー初心者とスポーツマウスガード

—ヘッドスピードならびにパッティングに与える影響について—

○鷹股哲也¹, 沼尾尚也¹, 加藤優美子¹, 橋井公三郎¹, 片瀬志穂²,
山下秀一郎², 正村正仁³, 安西正明⁴¹(松本歯大・口腔診断), ²(松本歯大・歯科補綴Ⅱ),³(松本歯大・小児歯科), ⁴(松本歯大・歯科保存Ⅱ)

7. 人歯3次元モデルの作製 第2報

—齲蝕歯モデル—

○永沢 栄¹, 吉田貴光¹, 田村 郁², 新井嘉則³, 山田博仁⁴,
笠原悦男⁴, 伊藤充雄¹¹(松本歯大・歯科理工), ²(松本歯大・生体材料),³(松本歯大・病態評価), ⁴(松本歯大・歯科保存Ⅱ)

8. 3D 歯牙ボクセルモデルを用いた歯科教育

—歯内療法学への応用—

○吉田貴光¹, 永沢 栄¹, 伊藤充雄¹, 田村 郁², 竹内 賢²,
前田美樹³, 山田博仁³, 笠原悦男³¹(松本歯大・歯科理工), ²(松本歯大・生体材料),³(松本歯大・歯科保存Ⅱ)

特 別 講 演

15:50~16:50 座長 小澤英浩 総合歯科医学研究所所長

最先端コンピュータ支援インプラント手術

～チーム医療のなかのインプラント～

越智守生 教授 (北海道医療大学歯学部 口腔機能修復・再建学系
クラウンブリッジ・インプラント補綴学分野)**17:00** 閉会の辞 小澤英浩 総合歯科医学研究所所長

講演抄録

1. 歯胚基底膜におけるIV型コラーゲン α 鎖の消長に関する免疫組織化学的研究中野敬介¹, 永井教之², 川上敏行¹¹(松本歯大院・病態解析), ²(岡山大院・口腔病理)

【目的】

歯の形態形成と細胞分化は上皮-間葉の相互作用によって制御されており, 基底膜はそれらの相互作用に関与している. 基底膜の主要構成成分であるIV型コラーゲン分子は3本の α 鎖から構成され, α 鎖は $\alpha 1 \sim 6$ の6種類が存在している. その結果, IV型コラーゲンのサブタイプは3種類($\alpha 1, \alpha 2, \alpha 3 \alpha 4 \alpha 5, \alpha 5, \alpha 6$)存在し, 臓器特異性を示すことが知られており, 近年では組織発生における時期特異性も指摘されている. 従って, 歯の形態形成においても基底膜IV型コラーゲンの時期および部位特異的な局在が存在すると考えられる. 本研究では基底膜の主要な構成成分であるIV型コラーゲンを構成する6種類の α 鎖について, 歯胚と歯原性腫瘍の基底膜における局在を検討した.

【方法】

マウス歯胚の検索にはICR系マウスの下顎第一臼歯歯胚を用いた. ヒト歯胚については上顎乳中切歯歯胚, 歯原性腫瘍については, エナメル上皮腫, 腺様歯原性腫瘍, エナメル上皮線維腫, 歯牙腫の症例を用いた. 各材料について, 厚さ4 μ mの凍結連続切片を作製し, 間接蛍光抗体法で α 鎖の検索を行った. 一次抗体にはIV型コラーゲン $\alpha 1 \sim 6$ 鎖NC1ドメイン特異的モノクローナル抗体(重井医学研究所), 二次抗体にはCy3標識マウス抗ラットIgG抗体(Jackson)を用いた.

【結果】

マウス歯胚の発生過程では, $\alpha 1$ と $\alpha 2$ 鎖は常に全ての基底膜に存在した. $\alpha 4$ 鎖は, 蕾状期までは口腔粘膜と歯胚周囲基底膜に存在したが, 帽状期以降は内エナメル上皮基底膜に局在した. $\alpha 5$ と $\alpha 6$ 鎖は蕾状期までは口腔粘膜と歯胚周囲基底膜に存在したが, 帽状期以降はエナメル上皮基底膜から消失した. 鐘状期のヒト歯胚ではマウスと同様の局在様式であった. ヒトの口腔粘膜, 歯堤の基底膜では $\alpha 1, \alpha 2, \alpha 5, \alpha 6$ 鎖が存在した. 歯原性腫瘍においても, エナメル上皮腫の基底膜ではこれと同様であったが, 腺様歯原性腫瘍, 歯牙腫, エナメル上皮線維腫では, これらに加え $\alpha 4$ 鎖が存在した. $\alpha 3$ 鎖は全ての検索材料で局在を示さなかった.

【考察】

マウス歯胚の各発生段階でIV型コラーゲンを構成する α 鎖に時期特異的な推移が存在し, 口腔粘膜と歯堤, 内エナメル上皮, 外エナメル上皮それぞれの基底膜に部位特異的な α 鎖の局在様式があった. この事は α 鎖の局在様式が歯の形態形成および細胞の機能分化に密接に関連していることを示唆している. マウスおよびヒト歯胚の内エナメル上皮基底膜には, $\alpha 4$ 鎖が存在し, $\alpha 3, \alpha 5$ 鎖が存在しないことから, 先に挙げた3つのIV型コラーゲンサブタイプ以外の, 従来知られていない新しいサブタイプが存在しており, これが上皮-間葉相互作用に重要な役割を担っている可能性が示唆された. また, 腫瘍においても $\alpha 4$ 鎖は腫瘍組織の形成や細胞の分化に重要な役割を演じている可能性が考えられた.

2. Wnt5a による破骨細胞の分化促進効果

前田和洋^{1,2}, 小林泰浩², 溝口利英³, 中道裕子², 山下照仁²,
衣川さや², 宇田川信之⁴, 丸毛啓史¹, 高橋直之²

¹(東京慈恵会医大・整形外科), ²(松本歯大・総歯研・機能解析),
³(松本歯大・総歯研・生体材料), ⁴(松本歯大・口腔生化)

【目的】

Wnt シグナルには, β -カテニンを介する古典経路とそれを介さない非古典経路がある. 共役受容体 LRP5 の変異の解析より, 古典経路は骨形成に重要なシグナルであることが示された. 一方, 骨吸収を調節する Wnt シグナルも解析され, 古典経路は, 骨芽細胞 (OB) の OPG の発現を誘導すること, 及び RANKL の発現を抑制することが報告された. しかし, β -カテニンを介さない非古典経路の骨吸収調節機構は不明であった. 我々は, 非古典経路を活性化する Wnt5a の破骨細胞 (OC) 分化に対する作用を検討し, Wnt5a は OC 形成を著しく促進することを見出した.

【方法・結果】

(1) Wnt5a は, RANKL が誘導するマウス骨髄マクロファージ (BMM ϕ) の OC への分化を濃度依存的に促進した. 同様に Wnt5a は, RAW 264.7 細胞とヒト CD 14 陽性細胞の OC への分化を促進した. (2) BMM ϕ 培養系において, Wnt5a の共役受容体である Ror2 の発現を shRNA 法でノックダウンしたところ, Wnt5a の OC 分化促進効果は消失した. (3) Wnt5a の生理活性を阻害する目的で可溶性 Ror2 (sRor2) を作製した. sRor2 を BMM ϕ 培養系に添加したところ, sRor2 は Wnt5a の OC 分化促進効果を抑制した. (4) RT-PCR 解析より, OB は BMM ϕ と比較して著しく高いレベルの Wnt5a を発現していた. (5) sRor2 をマウス骨芽細胞と骨髄細胞の共存培養系に添加したところ, sRor2 は活性型ビタミン D3 が誘導する OC 形成を濃度依存的に抑制した.

【考察・結論】

以上より, OB が分泌する Wnt5a は, OC 前駆細胞が発現する Ror2 に作用し, OC への分化を促進する可能性が示された. 関節リウマチの滑膜組織において, Wnt5a は高発現することが報告されている. 関節リウマチの骨破壊に, β -カテニンを介さない Wnt シグナル経路が重要な役割を有していることが示唆される.

3. 当科における顎変形症手術の変遷

安田浩一, 富田郁雄, 梅村哲弘, 上松隆司, 古澤清文
(松本歯大・口腔顎顔面外科)

【目的】

これまで当科で施行した顎変形症手術のほとんどは, 下顎枝矢状骨切り術 (SSRO) で, 骨片移動の自由度が大きいことから, その適応範囲は広い. しかしながら, 分割した骨片の固定方法については, 術後の後戻りや顎関節症状発現の点から改良の余地があり, 顎関節症を伴う症例に対しては下顎枝垂直骨切り術 (IVRO) を用いることもある. また, 著しい顎変形症に対しては, 仮骨延長の概念を応用した手術法を導入することによって, 安定した咬合と良好なプロフィールが得られるようになった. このように, 当科の顎変形症手術も変遷してきている.

そこで今回演者らはそれらの概要について報告する.

【対象】

松本歯科大学病院口腔外科における1989年4月から2007年3月までの症例のうち, SSRO 254例, IVRO 6例, 上下顎同時骨切り術7例, 上顎仮骨延長法5例について検討した.

【結果および考察】

全症例のうち242例 (89%) は, 本院歯科矯正科からの紹介で, 他は歯科矯正専門医からの紹介であった. SSRO における骨片の固定方法は, 1992年までは線結紮固定, 1994年まではスクリュー固定, 以降

はプレート固定が中心であった。プレート固定は手術侵襲が少なく術後成績が安定しているため、他の施設でも頻用されている。1998年以降、IVROは顎関節症を伴う下顎前突症に適應されており、良好な予後が得られている。しかしながら、本法は骨片の移動方向が後方のみに限られるために適應できない症例も多い。

上下顎同時骨切り術は中顔面の陥凹を伴う著しい顎変形症に適應されていたが、上顎の前方移動量は5mm程度が限界であることや、後戻りが多いことなどが問題であった。そこで1999年よりRigid External Distraction (RED) システムとLe Fort I型骨切りによる仮骨延長術が行われるようになり、これまでの問題点が改善された。

4. 過去10年間の当科における口腔癌治療の変遷と今後の課題

上松隆司, 松浦 隆, 寺本祐二, 高橋美穂, 堂東亮輔,
森 亮太, 安田浩一, 古澤清文
(松本歯大・口腔顎顔面外科)

【目的】

悪性新生物は、日本人の死因の第一位で、平成18年度の全死因の26%を占める。口腔癌の発症率は全癌の3-4%の占め、歯科医師の扱う疾患の中では治療方針の適否が死に直結することもあり、正確な診断と適切な治療が要求される。本発表では、松本歯科大学口腔外科が扱った口腔癌症例に対する治療の変遷と現在の治療状況を示すとともに、歯科医師による早期発見・早期治療の重要性ならびに本院における口腔癌治療の課題について検討を加えたので報告する。

【方法】

1997年7月から2007年6月までに松本歯科大学病院を受診した口腔癌一次治療症例、143症例を対象とした。TNM分類、病期分類、紹介元対診医療機関などを検討するとともに、口腔癌一次症例の治療法の変遷について検討した。

【結果および考察】

口腔癌症例の多くは、口腔内診察の機会が多い歯科医師によって発見され当院に紹介される傾向が高く、その病期は様々であった。1990年代の医療情報を得る手段の多くは、既往疾患の主治医に依存し、治療開始までの診察法が様々であったものの、チェアーサイド超音波検査の導入と診療放射線科と消化器内科との共同診療が開始された2002年からは、診察診断および経過観察法が確立された。当科における口腔癌治療の可否は、1999年までは遠隔転移の有無と再建可能であるかが基準であったものの、導入癌化学療法と前腕皮弁による即時再建術が応用された2000年からは転院率が低下する傾向がみられた。しかし、未だ病期期間が長い症例がみられ、口腔内診察の機会が多い歯科医師を中心とした病診連携や咬合・審美・機能回復を担う歯科医師による癌治療の有益性を示す外来診療体制を当院でも確立する必要があると考えられた。

5. 口腔癌手術における微小血管吻合術の応用

——当院の治療成績——

森 亮太, 上松隆司, 安田浩一, 堂東亮輔, 古澤清文
(松本歯大・口腔顎顔面外科)

【目的】

口腔癌の治療に際しては、咀嚼・構音・嚥下など複雑かつprimitiveな機能を司る顎口腔領域の特殊性を考慮しなくてはならない。なかでも、広範囲に浸潤した腫瘍の切除後には、口腔の機能や形態が著しく損なわれることが多い。このため、局所再発や転移を防ぎ、なおかつ、術後の障害をできるだけ少なくすることを目的として、これまで様々な治療法が考案されている。近年、比較的浸潤範囲の広い口腔癌の外科的療法において、微小血管吻合手術 (micro surgery) を用いた前腕皮弁による再建が選択

されることが多い。本口演では、当院で micro surgery を用いて手術した口腔癌症例の治療成績について報告した。

【方法】

検討対象は、松本歯科大学病院口腔外科で2000年1月から2006年3月に行われた悪性腫瘍手術症例のうち、腫瘍切除後に micro surgery を用いて前腕皮弁による再建を行った29症例について検討を行った。

【結果】

2000年1月から2006年3月までの6年3か月に行われた悪性腫瘍手術症例のうち、micro surgery を用いて前腕皮弁による即時再建を行った症例は男性15名、女性14名の29例であった。手術時年齢は22歳から81歳で、平均年齢は64.75歳であった。発症部位別では、下顎歯肉10例、舌・口底17例、頬粘膜2例で、病期別では Stage II が4例、Stage III が12例、Stage IV が13例と、進行癌に適用されており、Stage I には適用されていなかった。再建に用いた前腕皮弁の生着率は96.5%、腫瘍原発部位の局所再発率は13.7%、後発転移率は20.7%であった。

【考察】

経過観察期間は短いものの、micro surgery 用いた前腕皮弁による即時再建術は、頭頸部領域の比較的広範囲な腫瘍切除後の再建方法として有用であり、進行した口腔癌の治療成績向上に寄与していると考えられた。

6. アマチュアゴルファー初心者とスポーツマウスガード

——ヘッドスピードならびにパッティングに与える影響について——

鷹股哲也¹、沼尾尚也¹、加藤優美子¹、橋井公三郎¹、片瀬志穂²、

山下秀一郎²、正村正仁³、安西正明⁴

¹(松本歯大・口腔診断)、²(松本歯大・歯科補綴Ⅱ)、

³(松本歯大・小児歯科)、⁴(松本歯大・歯科保存Ⅱ)

【目的】

スポーツマウスガードはスポーツ時の顎顔面口腔領域の外傷予防効果を持つプロテクターとして知られているが、一方でスポーツパフォーマンスの影響についても論議されている。今回、ゴルフ競技におけるスポーツパフォーマンスとの関係を調べるために、アマチュアゴルファー初心者(本学ゴルフ部員)を対象にヘッドスピード(#1ドライバー)ならびにパッティングについて調査し、若干の知見を得たので報告する。

【方法】

本学ゴルフ部員の中から本研究に賛同し、協力しえた安定した咬頭嵌合位を有し顎機能に異常を認めない健康成人男子学生8名(平均年齢24.4歳、ゴルフ経験年数1～4年の初心者)を被験者として無作為に選んだ。対合歯の咬合印記のあるマウスガード(以下、MG、M-1)、対合歯の咬合印記のないMG(M-2)の2種類を作製し、被験者の口腔内にて咬合調整後実験に供し、MG非装着時(M-0)との比較を行った。測定項目は1. ヘッドスピード(#1)をPRGR製Speed Tester®を用い、約8分間隔で7回スウィングし、その平均値と標準偏差値を求めた。2. パッティングは練習用グリーンマットを用い、2mの距離から10回行った。評価項目は①カップイン数、②安定感、③集中力、④タイミングとした。②、③、④については被験者からの感想を、非常に良い5、良い4、どちらとも言えない3、やや悪い2、悪い1としてスコアリングした。統計処理はヘッドスピード、カップイン数は多重比較(Tukey法)で、スコアリングはウィルコクソンの符号付順位和検定を行った。

【結果】

ヘッドスピードではM-0、M-1、M-2間に有意な差はなかった($p < 0.05$)。カップイン数、集中力共に有意差はなく、安定感ではM-1が有意に良く、タイミングではM-0とM-2の比較において後

者が有意に悪い結果であった。

【考察】

普段装着し慣れていない MG は、被験者に異物感を与え、スポーツパフォーマンスにマイナスの要因となり易く、パッティングにおける本調査結果にもその影響をうかがい知ることが出来た。今回、ゴルフ経験年数平均2.1年という初心者を対象とした調査であったが、今後はシングルプレイヤーについても同様な調査を行い、MG とゴルフパフォーマンスとの関係を検討し、また握力、背筋力など基本的な運動能力に与える影響をも検討していく所存である。また、ヘッドスピードに与える影響因子にはシャフトの材質のほか硬さ、しなり、トルク、重量バランスなど、ヘッドの材質、大きさ、重量など多くあり、今後これらのデータとの関連も調査する予定である。

7. 人歯 3 次元モデルの作製 第 2 報

——齲蝕歯モデル——

永沢 栄¹, 吉田貴光¹, 田村 郁², 新井嘉則³, 山田博仁⁴,
笠原悦男⁴, 伊藤充雄¹

¹(松歯大・歯科理工), ²(松歯大院・生体材料),

³(松歯大院・病態評価), ⁴(松歯大・歯科保存Ⅱ)

【目的】

現在医療分野においては、CT, MRI 等の画像が一般的に使用されており、それに伴って人体の 3 次元モデルが多く作製され、研究や治療、学生の教育に盛んに活用されている。これに対し、歯科領域においては、CT の導入の遅れも原因して 3 次元モデルすら存在せず、教育分野における活用もなされていないのが現実である。

著者らは、誰もが使用できる 3 次元人歯データベースの構築を目的とし、ボクセルモデルの構築を試み、第60回松本歯科大学学会において報告した。現在この人歯モデルは、本学の全学生が無料で利用可能な状態となっている。

今回は、新たに52本の齲蝕歯モデルを作製したので報告する。

【方法】

抜去された人歯52本を、3次元マイクロX線CT (R_mCT, 理学) にて、0.05 mm×0.05 mm 間隔でX線撮影した。

得られた約35000枚の断層画像を、フォトショップ (Ver 7.0, Adobe) を使用して、アーチファクトの除去と不必要な部分のカットを行った。

修正した画像を、Micro-AVS (Ver 10.0, KGT) を用いて可視化した。

【結果ならびに考察】

可視化した画像からは、各歯のエナメル質、象牙質、歯髄の3次元形態を明瞭に把握することが可能であった。また、齲蝕の形態のみならず、その進行状況をも把握することが可能であった。

さらに、齲蝕部の多くには複数の亀裂が齲蝕中央を貫通していた。この亀裂は、抜去後の乾燥によるものとも考えられるが、口腔内において既に発生していた可能性もある。口腔内において既に発生していたものであるならば、歯の破折に大きく関係していると考えられた。

以上のごとく、今回作製した齲蝕歯モデルは、齲蝕の形態や進行状態、現実の歯髄の状態を3次元的に把握することが可能であり、学生の学習や新たな研究方法の一つとして有用であると考えられた。

8. 3D 歯牙ボクセルモデルを用いた歯科教育

——歯内療法学への応用——

吉田貴光¹, 永沢 栄¹, 伊藤充雄¹, 田村 郁², 竹内 賢²,
前田美樹³, 山田博仁³, 笠原悦男³

¹(松本歯大・歯科理工), ²(松本歯大院・生体材料), ³(松本歯大・歯科保存Ⅱ)

【目的】

近年のコンピューター技術の進歩により、歯科においても仮想歯科治療が行なわれつつある。我々は歯牙が透過率の異なる組織であることを利用し、天然抜去歯を CT にて撮影後、画像構築を行い、エナメル質、象牙質や歯髄腔などの歯牙構造を再現した 3D 歯牙ボクセルモデルを作製した。これらのデータはさまざまな研究や、教育等に応用可能である。特に根管形態などが観察できることから歯内療法学の教育に有効であると考えられる。

根管治療は直視しての処置が不可能なため、術者は手探りの状態で行なっている。よって過剰な形成や穿孔などの偶発症が発生しやすい。また 1 方向からの X 線撮影による平面像では、術者の行なった根管形成および根管充填の評価が難しい。そこで本実験は、3D 歯牙ボクセルモデル作製に用いた天然歯に対して根管治療を行い、術後の 3D モデルと比較することにより歯科教育への応用を比較検討した。

【方法】

ボクセルモデルの作製に使用した抜去歯を、2006年度松本歯科大学歯内療法学実習マニュアルに従い、開拡窩洞形成後、根管拡大ならびに根管充填を行なった。その後、実験小動物用マイクロ CT (R_mCT, RIGAKU) にて撮影後、画像処理ソフト (フォトショップ7.0, Adobe) にてアーチファクトを除去した後、可視化ソフト (MicroAVS 8.0, KGT) を使用してボクセルモデルを作製した。その後、根管拡大後のボクセルモデル、更に根管充填後のボクセルモデルを比較した。

【結果】

可視化したボクセルモデルにより、あらゆる角度からの観察が可能となった。その結果、直視できない漏斗状拡大やアピカルストップの形成などの根管拡大状態が立体的に観察された。また有鉤探針でしか確認できない天蓋の除去状態も容易に把握できた。

根管充填後のボクセルモデルからは根管充填の加不足や、充填材の 1 部が根管側枝にも充填されている状態などが観察された。また透過率の異なるセメントとガッタパーチャとを分割し再現することが可能であった。しかし X 線透過率の近い構造物や材料の分割ができない場合や、CT スライス像では確認できる根管充填材内部の気泡は観察できなかった。

【考察】

実験の結果、3D 歯牙ボクセルモデルによる根管治療状態の観察は、従来の方法よりも治療内容の評価が容易な場合があることから、歯内療学分野における歯科教育の 1 つの方法として非常に有用であると示唆された。

2007年度

第64回松本歯科大学学会総会

日・時 2007年7月7日(土)

総会 13時10分～14時00分

場 所 松本歯科大学 講義館201教室

1. 開会の辞
2. 会長挨拶
3. 物故会員黙祷 中村 武 名誉会長,
外村 誠 評議員
4. 議長選出
5. 審議事項
6. 閉会の辞

会議内容

第1号議案 2006年度事業報告

1. 庶務幹事
2. 集会幹事
3. 編集幹事
4. 会計幹事

第2号議案 2006年度決算および監査報告

第3号議案 2007年度事業計画

1. 庶務幹事
2. 集会幹事
3. 編集幹事
4. 会計幹事

第4号議案 2007年度予算

第5号議案 役員変更

第6号議案 その他

第1号議案 2006年度事業報告

1. 庶務事業報告 庶務幹事長／増田裕次

1) 準会員(6年生)入会説明会(5月31日)

長谷川庶務幹事

入会は任意であるが、卒業後の学術活動の場として入会していただけるよう説明した。

2) 幹事会開催

6月21日：1) 総会資料について

2) 役員改選について

3) 会員数

(1) 会員数 1566名

(2) 内訳

①名誉会員 16名

②新入会員 95名(29期生：84名,
一般：11名)

③賛助会員 13社

④準会員 74名(30期生)

(3) 退会者 111名(4年分会費未納による退会：106名, 希望退会：3名, 物故者：2名)

2. 集会事業報告 集会幹事長／山下秀一郎

1) 第62回松本歯科大学学会(総会)は、7月1日(土)開催。

一般講演は5演題であった。

2) 第63回松本歯科大学学会(例会)は、11月18日(土)開催。

一般講演は8演題であった。

3) 学会が主催、または後援した集会を以下の表に示した。

2006年度大学院セミナー23件、公開セミナー1件、特別講演1件

| | 開催日 | 内 容 | 講 師 | 招待講座名 | 申 請 者 |
|---|-------|------------|---------|--------|---------|
| 1 | 5月9日 | 大学院セミナー116 | 中山 浩 次 | 口腔細菌学 | 藤 村 節 夫 |
| 2 | 6月29日 | 大学院セミナー113 | 織 田 公 光 | 総歯研 | 高 橋 直 之 |
| 3 | 7月3日 | 大学院セミナー118 | 亀 山 洋一郎 | 総／病態解析 | 川 上 敏 行 |
| 4 | 7月12日 | 摂食・嚥下セミナー | 馬 場 尊 | 障害者歯科学 | 小笠原 正 |
| 5 | 7月18日 | 大学院セミナー117 | 田 村 正 人 | 総歯研 | 高 橋 直 之 |
| 6 | 7月21日 | 大学院セミナー119 | 岩 槻 健 | 総歯研 | 小 林 泰 浩 |
| 7 | 8月21日 | 大学院セミナー120 | 高 津 聖 志 | 口腔細菌学 | 藤 村 節 夫 |
| 8 | 9月29日 | 大学院セミナー123 | 森 山 芳 則 | 口腔生化学 | 宇田川 信 之 |

| | 開催日 | 内 容 | 講 師 | 招待講座名 | 申 請 者 |
|----|--------|------------|------------------|--------|---------|
| 9 | 10月6日 | 大学院セミナー125 | Prof. Gilles | 総歯研 | 森 本 俊 文 |
| 10 | 10月13日 | 大学院セミナー129 | アマール・サイカーン | 社会歯科学 | 中 田 稔 |
| 11 | 10月17日 | 大学院セミナー124 | 岩 本 容 泰 | 総歯研 | 小 澤 英 浩 |
| 12 | 11月6日 | 大学院セミナー128 | Liu Zi-Jun | 総歯研 | 増 田 裕 次 |
| 13 | 11月8日 | 大学院セミナー130 | David A Bereiter | 総歯研 | 金 銅 英 二 |
| 14 | 12月1日 | 大学院セミナー132 | 田 中 孝 昭 | 総歯研 | 高 橋 直 之 |
| 15 | 12月7日 | 大学院セミナー122 | 永 井 教 之 | 総／病態解析 | 川 上 敏 行 |
| 16 | 12月14日 | 大学院セミナー131 | 金 子 謙 | 総歯研 | 金 銅 英 二 |
| 17 | 1月10日 | 大学院セミナー134 | 鈴 木 治 | 口腔生化学 | 宇田川 信 之 |
| 18 | 1月19日 | 大学院セミナー133 | 林 豊 彦 | 総歯研 | 加 藤 一 誠 |
| 19 | 1月29日 | 特別講演 | 越 川 憲 明 | 総歯研 | 増 田 裕 次 |
| 20 | 2月14日 | 大学院セミナー138 | 窪 木 拓 男 | 口腔解剖Ⅱ | 中 村 浩 彰 |
| 21 | 2月23日 | 大学院セミナー136 | 中 島 友 紀 | 口腔生化学 | 宇田川 信 之 |
| 22 | 2月23日 | 大学院セミナー137 | 高 柳 広 | 総歯研 | 高 橋 直 之 |
| 23 | 3月6日 | 大学院セミナー142 | 河 合 達 志 | 総歯研 | 小 澤 英 浩 |
| 24 | 3月13日 | 大学院セミナー141 | 石 原 裕 一 | 口腔生化学 | 宇田川 信 之 |
| 25 | 3月16日 | 大学院セミナー140 | 渋谷 俊 昭 | 口腔生化学 | 宇田川 信 之 |

3. 編集事業報告 編集幹事長／井上勝博

- 1) 「松本歯学」第32巻第1号、第2号、第3号を発行した。
- 2) 第32巻では総説5篇、原著4篇、臨床8篇、症例報告4篇、図説2篇、大学院セミナー報告(4)1篇と2005年業績目録、第62回松本歯科大学学会(総会)・第63回松本歯科大学学会(例会)プログラムと講演抄録、2006年度松本歯科大学学会総会記録を掲載した。
- 3) 第32巻の総ページ数は271ページであった。第31巻より17ページ減であった。
- 4) 編集会議は2005年4月26日(水)、8月30日(水)、12月20日(水)の3回開いた。

4. 会計事業報告 会計幹事長／浅沼直和

- 1) 会費徴収について
 - (1) 学内会員 10月給与からの引き落としにて会費徴収→10月
 - (2) 学外会員 雑誌「松本歯学」発行時に個別に会費徴収→7月、12月、3月
 - (3) 賛助会員 雑誌「松本歯学」発行時に各社に請求→7月

- (4) 準会員費 6年生の任意入会により、会費徴収→7月

2) その他

- (1) 広告掲載料請求
雑誌「松本歯学」への広告掲載料請求→雑誌発行時7月
- (2) 論文超過料金請求

第2号議案 2006年度決算及び監査報告

会計幹事長／浅沼直和

- 別紙 松本歯科大学学会2006年度決算書及び2007年度予算書
- ・資金収支計算書及び2007年度予算書
 - ・貸借対照表
 - ・会計監査報告書

第3号議案 事業計画

1. 庶務事業計画 庶務幹事長／増田裕次

- 1) 準会員(6年生)入会説明会
5月19日(土)実施済み 増田庶務幹事
- 2) 幹事会開催
6月26日(火)
 - 1) 総会資料について
 - 2) 役員一部変更について

3. 役員一部変更：別紙

2. 集会事業計画 集会幹事長／山下秀一郎

- 1) 第64回学会（総会） 7月7日(土)
- 2) 第65回学会（例会） 11月17日(土)
- 3) 特別講演ならびに公開講座 4回
- 4) 大学院セミナー後援 30回

3. 編集事業計画 編集幹事長／中村浩彰

- 1) 「松本歯学」第33巻1, 2, 3号を発行する。
- 2) 学会員に総説, ミニレビューの執筆を依頼する。
- 3) 編集会議を年度内に3回開く。

4. 会計事業計画 会計幹事長／浅沼直和

- 1) 会費徴収について
 - (1) 学内会員 10月給与からの引き落としにて徴収→10月
 - (2) 学外会員 雑誌「松本歯学」発行時に個別に会費徴収→7月, 12月, 3月
 - (3) 賛助会員 雑誌「松本歯学」発行時に各社に請求→7月
 - (4) 準会員費 6年生の任意入会により, 会費徴収→7月
- 2) その他
 - (1) 広告掲載料請求
雑誌「松本歯学」への広告掲載料請求→雑誌発行時7月
 - (2) 論文超過料金請求

第4号議案 2007年度予算

会計幹事長／浅沼直和

別紙

第5号議案 役員変更

庶務幹事長／増田裕次

1. 会 長 新任：森本俊文
退任：矢ヶ崎 康
2. 名誉会員 新任：甘利光治, 太田紀雄,
笠原 浩, 出口敏雄,
廣瀬伊佐夫
退任：中村 武
3. 幹事長 編集幹事長／新任：中村浩彰

退任：井上勝博

4. 幹 事 庶務幹事／新任：音琴淳一

退任：甘利光治

会計幹事／新任：山田一尋

退任：新井嘉則

編集幹事／新任：小笠原 正,

岡藤範正,

澁谷 徹,

吉成伸夫

退任：太田紀雄,

笠原 浩,

出口敏雄,

廣瀬伊佐夫

集会幹事／新任：高橋慶壮

退任：矢ヶ崎 裕

学外評議員／退任：石橋成郎,

外村 誠

評議員の任期は2007年度まで。

第6号議案 その他

庶務幹事長／増田裕次

2007年度役員

| | | | |
|------|-------|------|-------|
| 名誉会長 | 矢ヶ崎 康 | | |
| 顧問 | 矢ヶ崎 雅 | | |
| 名誉会員 | 橋本京一 | 丸山 清 | 今西孝博 |
| | 恩田千爾 | 野村浩道 | 橋口緯徳 |
| | 和田卓郎 | 千野武廣 | 枝 重夫 |
| | 鈴木和夫 | 川原一祐 | 原田 實 |
| | 前橋 浩 | 安田英一 | 西連寺永康 |
| | 近藤 武 | 甘利光治 | 太田紀雄 |
| | 笠原 浩 | 出口敏雄 | 廣瀬伊佐夫 |

会 長 森本俊文

副会長 小澤英浩 中田 稔

庶務幹事 ○増田裕次 王 宝禮 音琴淳一

加藤一誠 黒岩昭弘 塩島 勝

高橋直之 長谷川博雅 吉澤英樹

会計幹事 ○浅沼直和 笠原悦男 古澤清文

宮沢裕夫 山田一尋

編集幹事 ○中村浩彰 井上勝博 宇田川信之

小笠原 正 岡藤範正 川上敏行

金銅英二 倉澤郁文 澁谷 徹

柳沢 茂 山岡 稔 吉成伸夫

集会幹事 ○山下秀一郎 伊藤充雄 栗原三郎

佐原紀行 高橋慶壮 平岡行博
 山本昭夫
 監 事 藤村節夫、鷹股哲也
 評 議 員
 浅沼 直和 伊藤 充雄 井上 勝博
 岩崎 浩 上松 隆司 宇田川信之
 王 宝禮 大須賀直人 小笠原 正
 岡藤 範正 小澤 英浩 音琴 淳一
 笠原 悦男 笠原 香 加藤 一誠
 加藤 隆史 川上 敏行 熊井 敏文
 栗原 三郎 倉澤 郁文 黒岩 昭弘
 小林 泰浩 金銅 英二 佐原 紀行
 塩島 勝 柴田 幸永 澁谷 徹
 高橋 慶壮 高橋 直之 鷹股 哲也
 富田美穂子 中田 稔 中村 浩彰
 永澤 栄 長谷川博雅 服部 敏己
 平賀 徹 平井 要 平岡 行博
 深澤加與子 古澤 清文 藤村 節夫

穂坂 一夫 増田 裕次 宮沢 裕夫
 森本 俊文 矢ヶ崎 雅 矢ヶ崎 裕
 矢ヶ崎 康 安田 浩一 柳沢 茂
 山岡 稔 山下秀一郎 山田 一尋
 山本 昭夫 吉澤 英樹 吉成 伸夫
 安藤 三男 岩井 啓三 片倉 恵男
 鹿毛 俊孝 北村 博文 北村 豊
 神津 瑛 小松 正隆 佐藤 勝也
 戸荊 惇毅 中後 忠男 中村 千仁
 林 牧 峯村 隆一 山田 哲男

備考

- 1) ○は幹事長
- 2) 任期は2007年度まで
- 3) アンダーラインは新規
- 4) 名誉会員および会則13条の(2)で規定された評議員以外は総会の議を経る必要ありません。

資金収支計算書及び2007年度予算書

2006年4月1日から
 2007年3月31日まで

(単位：円)

| 収 入 の 部 | | | | |
|-------------------|------------|------------|---------|------------|
| 科 目 | 予 算 | 決 算 | 差 異 | 2007年度予算 |
| 入 会 金 収 入 | 150,000 | 127,500 | 22,500 | 150,000 |
| 会 費 収 入 | 6,000,000 | 5,745,500 | 254,500 | 6,000,000 |
| 論 文 掲 載 料 収 入 | 100,000 | 17,500 | 82,500 | 100,000 |
| 広 告 掲 載 料 収 入 | 400,000 | 408,000 | △8,000 | 400,000 |
| 受 取 利 息 収 入 | 5,000 | 4,219 | 781 | 5,000 |
| 大 学 補 助 金 収 入 | 1,000,000 | 1,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| 雑 収 入 | 10,000 | 6,877 | 3,123 | 10,000 |
| 前 受 金 収 入 | 600,000 | 532,000 | 68,000 | 600,000 |
| 前 期 末 未 収 入 金 収 入 | 1,000,000 | 533,000 | 467,000 | 1,000,000 |
| 期 末 未 収 入 金 | △2,000,000 | △2,042,025 | 42,025 | △2,000,000 |
| 前 期 末 前 受 金 | △640,500 | △640,500 | 0 | △581,000 |
| 計 | 6,624,500 | 5,692,071 | 932,429 | 6,684,000 |
| 前 年 度 繰 越 支 払 資 金 | 22,280,233 | 22,280,233 | | 22,379,708 |
| 収 入 の 部 合 計 | 28,904,733 | 27,972,304 | 932,429 | 29,063,708 |

| 支 出 の 部 | | | | |
|-------------------|------------|------------|------------|------------|
| 科 目 | 予 算 | 決 算 | 差 異 | 2007年度予算 |
| 支払手数料 (人材派遣) | 1,000,000 | 986,579 | 13,421 | 1,000,000 |
| 印刷費制作費支出 | 4,500,000 | 4,463,776 | 36,224 | 4,500,000 |
| 通 信 費 支 出 | 1,000,000 | 769,625 | 230,375 | 1,000,000 |
| 特 別 講 演 料 支 出 | 440,000 | 222,222 | 217,778 | 440,000 |
| 旅 費 交 通 費 支 出 | 200,000 | 54,280 | 145,720 | 200,000 |
| 打 合 せ 会 議 費 支 出 | 700,000 | 510,770 | 189,230 | 700,000 |
| 消 耗 品 支 出 | 150,000 | 36,322 | 113,678 | 350,000 |
| 雑 費 支 出 | 40,000 | 25,820 | 14,180 | 40,000 |
| 備 品 支 出 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 前 期 未 払 い 金 支 出 | 135,000 | 134,050 | 950 | 1,600,000 |
| 期 末 未 払 金 | 0 | △1,610,848 | 1,610,848 | 0 |
| [予 備 費] | 500,000 | | 500,000 | 500,000 |
| 計 | 8,665,000 | 5,592,596 | 3,072,404 | 10,330,000 |
| 次 年 度 繰 越 支 払 資 金 | 20,239,733 | 22,379,708 | △2,139,975 | 18,733,708 |
| 支 出 の 部 合 計 | 28,904,733 | 27,972,304 | 932,429 | 29,063,708 |

◎次年度繰越支払資金内訳

| | |
|---------------|-------------|
| 決済用預金 | 7,367,007円 |
| 定期預金 (八十二 BK) | 7,693,593円 |
| 定期預金 (りそな BK) | 7,319,108円 |
| 計 | 22,379,708円 |

◎前受金内訳

| | |
|---------------|---------------------------------|
| 正会員2007年度分 | 28,000円 (2006年度入金分: 10,500円) |
| 29期生2007年度分 | 294,000円 (3,500×84名分) |
| 30期生2007年度分 | 259,000円 (2006年度入金分: 3,500×74名) |
| 正会員2008年度分 | 14,000円 (2006年度入金分: 3,500円) |
| 正会員2009～17年度分 | 49,000円 |
| 30期生2008年度分 | 259,000円 (2006年度入金分: 3,500×74名) |
| 計 | 903,000円 |

◎会費収入内訳

| | |
|-------|-----------------------------|
| 正会員費 | 5,197,500円 (3,500×1485名分) |
| 準会員費 | 148,000円 (2,000×74名分) |
| 賛助会員費 | 400,000円 (10,000×40口分, 12社) |
| 計 | 5,745,500円 |

◎未収入金内訳

| | |
|-------|------------|
| 正会員費 | 7,332,025円 |
| 論文掲載料 | 11,500円 |
| 計 | 7,343,525円 |

貸 借 対 照 表

2007年3月31日

(単位:円)

| 資 産 の 部 | | | |
|------------------------|------------|------------|------------|
| 科 目 | 本 年 度 末 | 前 年 度 末 | 増 減 |
| 固 定 資 産 | 0 | 0 | 0 |
| 有形固定資産 | 0 | 0 | 0 |
| 備 品 | 0 | 0 | 0 |
| 流 動 資 産 | 29,723,233 | 29,586,733 | 136,500 |
| 現 金 預 金 | 22,379,708 | 22,280,233 | 99,475 |
| 未 収 入 金 | 7,343,525 | 7,306,500 | 37,025 |
| 資産の部合計 | 29,723,233 | 29,586,733 | 136,500 |
| 負 債 の 部 | | | |
| 科 目 | 本 年 度 末 | 前 年 度 末 | 増 減 |
| 固 定 負 債 | 322,000 | 371,000 | △49,000 |
| 前 受 金 | 322,000 | 371,000 | △49,000 |
| 流 動 負 債 | 2,191,848 | 774,550 | 1,417,298 |
| 前 受 金 | 581,000 | 640,500 | △59,500 |
| 未 払 金 | 1,610,848 | 134,050 | 1,476,798 |
| 負債の部合計 | 2,513,848 | 1,145,550 | 1,368,298 |
| 基 本 金 の 部 | | | |
| 科 目 | 本 年 度 末 | 前 年 度 末 | 増 減 |
| 基 本 金 | 0 | 0 | 0 |
| 基本金の部合計 | 0 | 0 | 0 |
| 消費収支差額の部 | | | |
| 科 目 | 本 年 度 末 | 前 年 度 末 | 増 減 |
| 翌年度繰越消費収入超過額 | 27,209,385 | 28,441,183 | △1,231,798 |
| 消費収支差額の部合計 | 27,209,385 | 28,441,183 | △1,231,798 |
| 科 目 | 本 年 度 末 | 前 年 度 末 | 増 減 |
| 負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計 | 29,723,233 | 29,586,733 | 136,500 |

松本歯科大学学会の2006年度決算各項について監査を行った結果、会計の収支において、適正に扱われていることを認めます。

2007年6月13日

監事 藤 村 節 夫 (印)

監事 鷹 股 哲 也 (印)